

日本学術振興会 研究拠点形成事業（A. 先端拠点形成型）

中間評価（平成30（2018）年度採択課題）結果

日本側拠点機関名 早稲田大学（教授・中村 英俊）

研究交流課題名 流動化するグローバルなレベル秩序におけるEUと日本：地域間研究の拠点形成

評価結果（総合的評価）

- A 想定以上の成果をあげつつあり、当初の目標の達成が大いに期待できる。
- B 想定どおりの成果をあげつつあり、現行の努力を継続することによって目標の達成が概ね期待できる。
- C ある程度の成果をあげつつあるが、目標達成のためには一層の努力が必要である。
- D 成果が十分にあるとは言えず、目標の達成が期待できないため、経費の減額または中止が適当であると判断される。

所見

本課題は、これまでのところ、ほぼ想定通りの成果をあげつつある。さらに研究テーマを発掘し探究しようとする意欲も見受けられるが、新規（サブ）プロジェクトが軌道に乗るというところまでは至っていない。日本側拠点の参加研究者は、当該分野での優れた業績を有する研究者と若手研究者とを適切な比率で含んでいる。相手国拠点機関はいずれも優れた研究機関であり、コーディネーターも一流の研究者であることから、世界的水準の国際研究交流拠点となるポテンシャルは十分にある。

研究成果については、現時点での公刊業績はそれほど多くないが、論文や論文集などの準備が着実に進められており、これまでの交流成果が今後複数の論文集として公刊される予定となっている。これまでの活動を続けていけば、計画において掲げられた目標を達成することは十分に期待できるところである。但し、2年間の研究成果については、国際的な共著論文や共編著の公刊実績ならびに執筆者の広がりの中で限定的である。発表や業績の多くが拠点ごとになされた研究にもとづいており、今後複数の拠点に所属する研究者による国際共著論文や国際共同発表の充実が望まれる。

若手研究者育成については、共同研究、セミナー、若手研究者の相互派遣、論文執筆や論文集の準備などが日本ならびに相手国の若手研究者の育成をうながす仕組みとなって機能している。コチュテル制度を通じた博士号取得者を1名生み出すなど、実績も出している。若手研究者の長期滞在も相互に行われているが、日本側からの派遣がベルギーに偏っているため、他の拠点にも派遣が実現することが望ましい。

後半の事業展開では、若手研究者による成果の可視化もふくめ、個々の研究課題・部会の活動の延長上に生ずる成果だけでなく、本研究計画全体を統合した独自の成果（理論的枠組、分析視角、新たな知見など）が容易に理解できる形で提示する工夫が求められる。これは、本研究計画の終了後の展開に不可欠であり、例えば、本研究計画が方向性として示している、他地域との比較にとっては礎石となるものである。